

日本各地 15 大学の埋蔵文化財と調査・研究

大学と 埋蔵文化財

～キャンパスの遺跡・発見された文化財の魅力～



2019

広島大学総合博物館



広島大学総合博物館

■広島大学では、広島市から東広島市への統合移転に伴い、東広島地区で1978年以降行われた分布調査によって遺跡が発見され、1981年に統合移転埋蔵文化財調査委員会が設置されました。調査は前身の埋蔵文化財調査室が担い、2004年の大学独法化以降は全キャンパスの埋蔵文化財調査に携わることとなり、2011年の総合博物館との合併によって現在の埋蔵文化財調査部門と改められました。現在までに、東広島市の東広島地区、西条三永地区、広島市の霞地区、東千田地区、翠地区、廿日市市の宮島地区、三原市の三原地区、竹原市の竹原地区において遺跡が確認されています。その中心となる東広島地区では31遺跡が発見されましたが、大学は文化財の大切さを理解しながらキャンパスの開発を進め、今も22遺跡が残されています。

■東広島地区では各時代の遺跡が発見されています。鴻の巣遺跡から出土したナイフ形石器や局部磨製石斧などの一群は、後期旧石器時代前半（約3万年前）のものと位置づけられ、西ガガラ遺跡第1地点出土の後期旧石器時代前半と中頃の資料と共に中国地方西部地域の編年基準資料となっています。

弥生時代の生活の痕跡は、鏡西谷遺跡や鴻の巣南遺跡などから発見されました。弥生中期から後期の壺や甕等の土器に加え、石鏃や砥石、祭祀に関係した道具とされる分銅形土製品や絵画土器も見つかっています。竪穴住居跡も多数検出され、一部は埋め戻して現地保存しています。

中世の遺跡としては、国史跡である中世鏡山城跡の南麓に位置する鏡西谷遺跡や鏡東谷遺跡などがあります。居館跡と考えられる掘立柱建物や墳墓が検出され、土師質土器の坏や皿に加えて、瓦器、中国産青磁碗、東播系須恵器、亀山焼などが出土しています。

旧石器時代から中世・近世に至るまでの各時代の遺跡の存在は、西条盆地が人々にとって暮らしやすい場所だったことを物語っています。

■広島市内の霞地区では、広島陸軍兵器補給廠（武器弾薬の倉庫）関連の煉瓦組の建物基礎やそれを地中で支える松杭列、軽便鉄道軌道跡、石組の柵や水路などが発見されました。東千田地区では広島高等師範学校の建物跡、翠地区では旧制広島高等学校の宿舍跡などが確認されました。これらの地区からは防衛食容器や統制食器、陸軍の軍用食器、病院食器などの近現代の歴史や文化を物語る特徴的な遺物が出土しています。

遺跡から出土した多様な資料は、埋蔵文化財調査部門の展示室で見学することができます。また、保存した遺跡は説明板を設置し、竪穴住居跡や須恵器窯跡を復元整備するなどして、遺跡巡りなどの教育普及活動を通して活用を努めています。

(石丸 恵利子)



陣が平西遺跡出土の須恵器

古墳時代の須恵器焼成窯跡2基や竪穴住居跡が発見された陣が平西遺跡から出土した坏身、坏蓋、高坏、埴、鉢、甕、平瓶です。西条盆地では数少ない生産遺跡の資料で、広島県西部における古墳時代後期（6世紀後葉～7世紀初頭）の編年基準資料となっています。



鏡西谷遺跡遠景（南より）